歴史と深谷市への移築

誠之堂と清風亭は、ともに東京都世田谷区瀬田にあった第一銀行の保養・スポーツ施設「清和園」の敷地内に建てられていたものを現在地に移築復元したものである。

清和園は、当時あまり公開されることのなかった建築物であったが、建築研究者や建築関係者の間では、いずれも日本近代建築史上、大正時代を代表する建築物として高い評価を受けていた。

当初は、銀行関係者のための集会施設として長い期間利用されていた。

昭和４６年、清和園の敷地の過半は、聖マリア学園（セント・メリーズ・インターナショナル・スクール）に売却され、昭和５０年代には、誠之堂は外国人教師の校宅として、清風亭は集会所として貸し出された。

建物や敷地は、銀行（当時第一勧業銀行）の所有であったが、平成９年、学園の施設拡充計画に伴い、これらの建物も取壊しの危機に瀕することになった。渋沢栄一生誕の地である深谷市は、数少ない栄一にゆかりの貴重な建物が取り壊されることを見過ごすことはできず、譲受けに名乗りをあげ、深谷市へ移築復元することができた。

しかし、このような文化財的価値の高い建築物、特に煉瓦構造物の移築は、日本でも初めての試みであったため、深谷市では移築保存検討委員会を設置し、移築方法等の検討を重ねた。その結果、「大ばらし」を応用した日本初の工法により実施することを決定した。これは、煉瓦壁をなるべく大きく切断して搬送し、移築先で組み直す工法である。

平成１０年２月から２年間の解体・復元工事を経て、平成１１年８月に移築復元が完成した。

移築復元の方針として、現状維持を基本とし、後世の改変部分はできる限り創建時の姿に復旧した。また、清和園当時から２つの異なった様式の建物が並び建っていることが一層それぞれの存在価値を引き立てている、と評価されていたため、清和園での配置とほぼ同様に移築した。

平成１１年１１月、深谷市は両建物を「誠之堂・清風亭」という公の施設として設置し、現在広く市民等の見学に供している。貴重な建築物の保存を図るとともに、地域の中に生きる文化財として活用している。

スタンプ

ご案内図

誠之堂・清風亭

埼玉県深谷市起会１１０番地１

■見学時間　午前９時～午後５時
■休館日　年末年始（12月29日～１月３日）
■問合せ先　深谷市教育委員会　文化振興課　電話／(048)577-4501
大寄公民館　電話／(048)571-0341

編集／深谷市教育委員会　発行／平成24年６月29日
平成25年４月30日

国指定重要文化財　誠之堂（せいしどう）

誠之堂・清風亭

埼玉県指定有形文化財　清風亭（せいふうてい）

誠之堂

誠之堂は、大正５年（１９１６）、渋沢栄一の喜寿（７７歳）を記念して第一銀行行員たちの出資により建築された。

渋沢栄一は、現在の深谷市に生まれ、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ日本の近代経済社会の基礎を築いたが、その拠点としたのが第一国立銀行であり、明治２９年に同行が第一銀行となってからはその初代頭取を務めた。

栄一は、喜寿を迎えるのを機に、第一銀行頭取を辞任したが、誠之堂の建築には栄一が同行の行員たちから深く敬愛されていたことが伺われる。

「誠之堂」の命名は、栄一自身によるもので、儒教の代表的な経典のひとつ「中庸」の一節「誠者天之道也、誠之者人之道也（誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり）」にちなんだものである。

設計者は、当時の建築界の第一人者であった田辺淳吉。誠之堂の設計にあたっては、条件とされた「西洋風の田舎屋」で「建坪は３０坪前後」を守りつつ、独自の発想を凝縮してこの建物を造り上げた。

建築面積１１２㎡、煉瓦造平屋建、外観は英国農家に範をとりながらも、室内外の装飾に、中国、朝鮮、日本など東洋的な意匠を取り入れるなど、様々な要素が盛り込まれ、それらがバランスよくまとめられている。

平成１５年５月３０日、国の重要文化財に指定。

誠之堂の装飾

煉瓦

暖炉の背後に接する北側外部壁面には、煉瓦による朝鮮風の装飾積みで「喜寿」の文字を表わしている。また、外壁にはあえて色ムラのある煉瓦を使用しリズミカルに配置することで、装飾性と変化を与えている。

なお、解体の際に外壁、基礎の各所から「上敷免製」の刻印のある煉瓦が発見され、これらの煉瓦は、深谷市上敷免に所在する日本煉瓦製造株式会社で焼かれたものであることが確認された。

ステンドグラス

化粧の間や大広間の窓のステンドグラスは目を引く。大広間のものの図案は、森谷延雄による。

中国風の珍しい題材で、漢代の貴人と侍者、それを饗応する歌舞奏者と厨房の人物たちの像は、栄一を貴人に見立て喜寿を祝う情景と考えられている。

天井装飾

大広間の円筒型の漆喰天井（ヴォールト天井）は、石膏レリーフにより雲、鶴、松葉の縁、寿の文字が配され朝鮮風、一方、次之間の天井は、日本的な網代天井で、数寄屋造りの様式を採り入れている。

清風亭

清風亭は、大正１５年（１９２６）、当時第一銀行頭取であった佐々木勇之助の古希（７０歳）を記念して、誠之堂と並べて建てられた。

建築資金は、誠之堂と同じくすべて第一銀行行員たちの出資によるものである。

佐々木は、若干２８歳での第一国立銀行本店支配人就任をはじめとして、同行の数々の役員を歴任し、大正５年、栄一を継いで第一銀行第２代頭取に就任した。勤勉精励、謹厳方正な性格で知られ、終始栄一を補佐した。栄一の精力的な活躍も佐々木の手腕と人格によるところが大きかったと考えられる。

清風亭は、当初、佐々木の雅号をとって「茗香記念館」等と称されたが、後に「清風亭」と呼ばれるようになった。

設計者は、銀行建築の第一人者の西村好時。

建築面積１６８㎡で、鉄筋コンクリート造平屋建、外壁は人造石掻落し仕上げの白壁に黒いスクラッチタイルと鼻黒煉瓦がアクセントをつけている。屋根のスパニッシュ瓦、ベランダのアーチ、出窓のステンドグラスや円柱装飾など、西村自身が「南欧田園趣味」と記述している当時流行していたスペイン風の様式が採られている。

大正１２年の関東大震災を契機に、建築構造は、煉瓦造から鉄筋コンクリート造に主流が代わったが、その初期の建築物としても建築史上貴重なものである。

平成１６年３月２３日、埼玉県指定有形文化財に指定。

田辺淳吉と西村好時

誠之堂を設計した田辺と清風亭を設計した西村は、いずれも大正期建築を代表する設計者である。

田辺淳吉

当時「清水組（現清水建設株式会社）」の技師長として数多くの建築家を育てる一方、晩香廬、青淵文庫（ともに東京北区）など、多くの栄一に関わる建物の設計に携わった。

芸術的志向が強く、セセッションの旗手といわれたが、特に誠之堂などの小規模な作品に本領が見られる。

（資料提供：博物館明治村）

西村好時

田辺の推挙で清水組に入り田辺の片腕となり活躍した後、第一銀行建築課長に就任し、銀行建築の第一人者として東京丸の内の第一銀行新本店を始め一連の第一銀行の建物、支店長社宅、証券会社建築等の銀行関連施設を手がけた。また、東京三田の栄一や渋沢敬三の邸宅（現在、青森県三沢市に移築）も西村の設計による。

（資料提供：清水建設株式会社）